

=== T A C S 情報 第8号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和5年7月18日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、18.0℃（対平年差+0.5℃）と平年に比べ高かった。

6月の平均気温は、22.7℃（同+1.3℃）と平年に比べかなり高かった。

7月1～3半旬の平均気温は、26.3℃（同+1.9℃）と平年に比べ高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、260.0mm（対平年比212%）と平年に比べかなり多かった。

6月の降水量は、213.0mm（同123%）と平年に比べ多かった。

7月1～3半旬の降水量は、342.5mm（同232%）と平年に比べかなり多かった。

(3) 日射量

5月の平均日射量は、19.7MJ/m²/日（対平年比107%）と平年に比べ多かった。

6月の平均日射量は、17.9MJ/m²/日（同103%）と平年並であった。

7月1～3半旬の平均日射量は、15.4MJ/m²/日（同100%）と平年並であった。

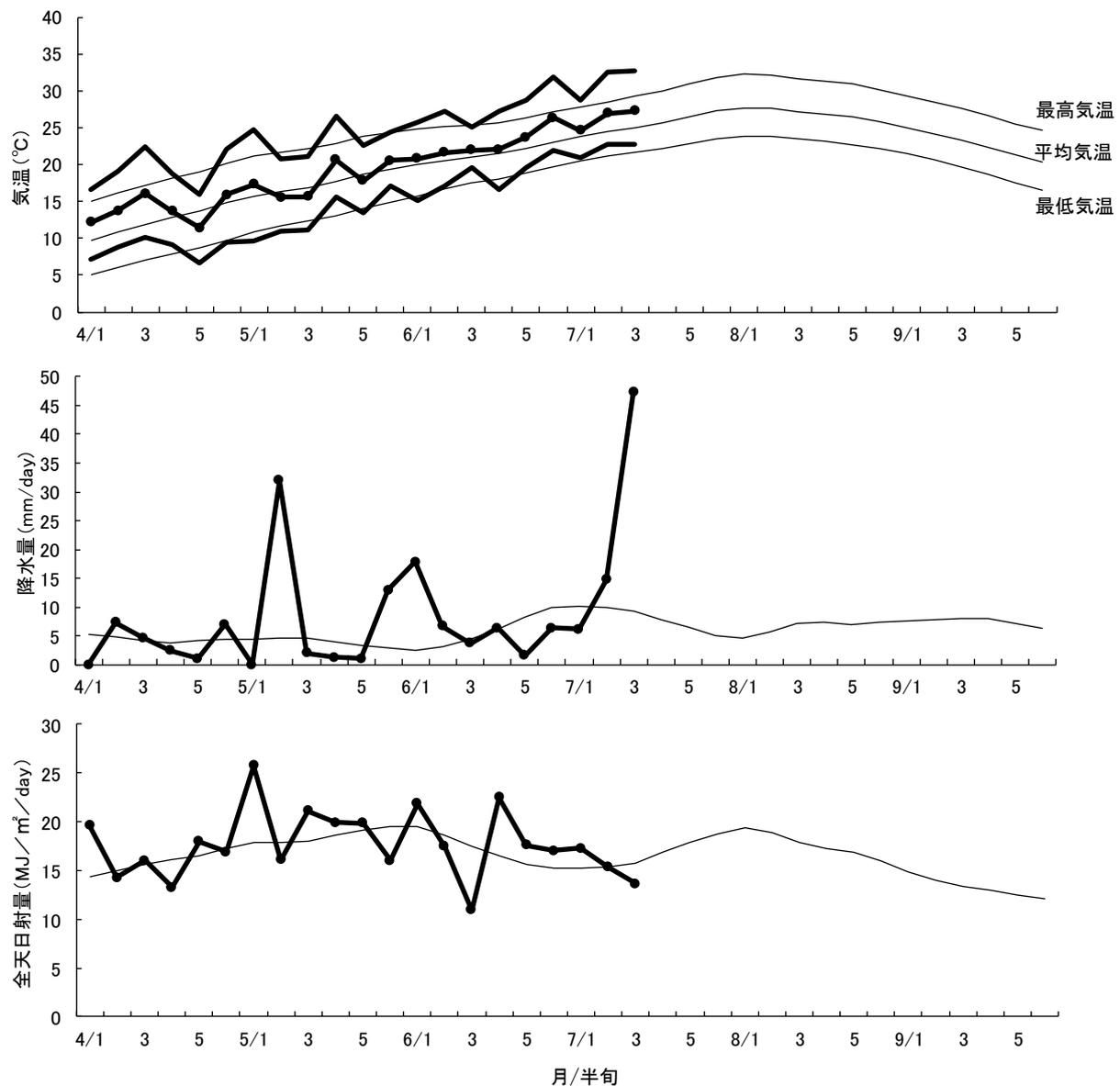


図1 令和5年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（1）コシヒカリ

平年に比べ、草丈、葉色、葉齢は並、茎数はやや少なくなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ1日早い7月10日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年より1日早い7月31日頃と見込まれる。

表1 「コシヒカリ」の生育状況（7月18日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R5	5月13日	82.9	20.5	442	13.2	4.0	30.6	7月10日	(7月31日)
R4	5月13日	87.5	21.5	474	13.3	4.0	32.7	7月8日	7月30日
平年	5月14日	83.1	21.6	468	13.1	4.0	32.9	7月11日	8月1日
前年比・差	0	95	95	93	-0.1	0.0	-2.1	2	(+1)
平年比・差	-1	100	95	94	0.1	0.0	-2.3	-1	(-1)

注1) 平年 : H25~R4の平均

注2) 本年の出穂期は予測値

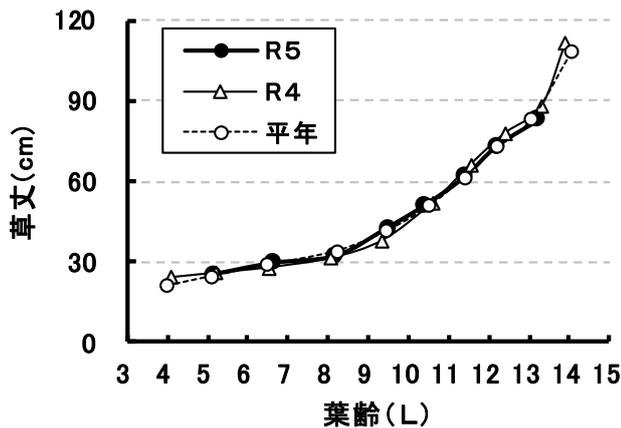


図2 草丈の推移（生観コシヒカリ）

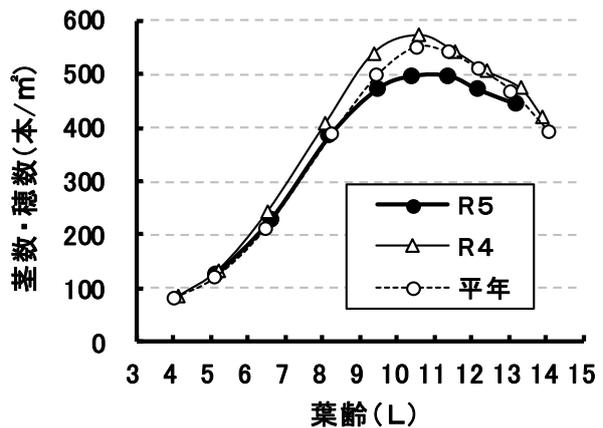


図3 茎数の推移（生観コシヒカリ）

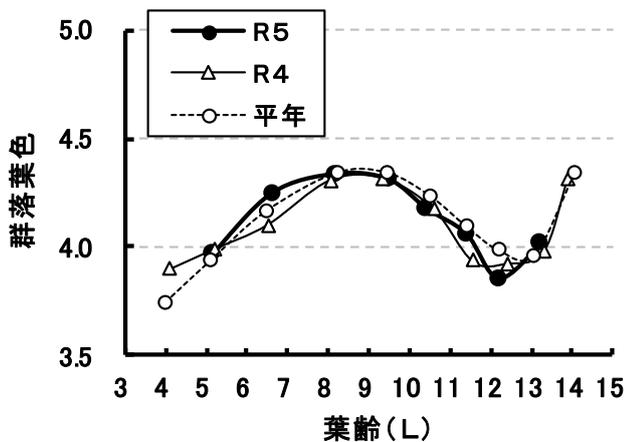


図4 葉色の推移（生観コシヒカリ）

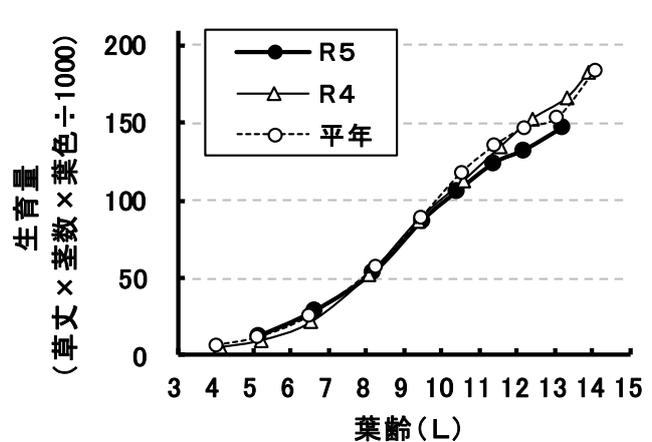


図5 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(2) てんこもり

平年に比べ、草丈、茎数、葉色は並、葉齢は0.2葉遅れている。

幼穂形成期は、平年に比べ1日遅い7月13日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ1日遅い8月4日頃と見込まれる。

表2 「てんこもり」の生育状況 (7月18日 生育観測ほ)

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R5	5月10日	73.7	29.0	561	14.0	4.1	33.0	7月13日	(8月4日)
R4	5月8日	77.0	29.4	556	14.4	4.1	33.8	7月11日	8月2日
平年	5月8日	75.3	29.7	566	14.2	4.2	34.8	7月12日	8月3日
前年比・差	2	96	98	101	-0.4	0.0	-0.8	2	(+2)
平年比・差	2	98	97	99	-0.2	-0.1	-1.8	1	(+1)

注1) 平年 : H25~R4の平均

注2) 本年の出穂期は予測値

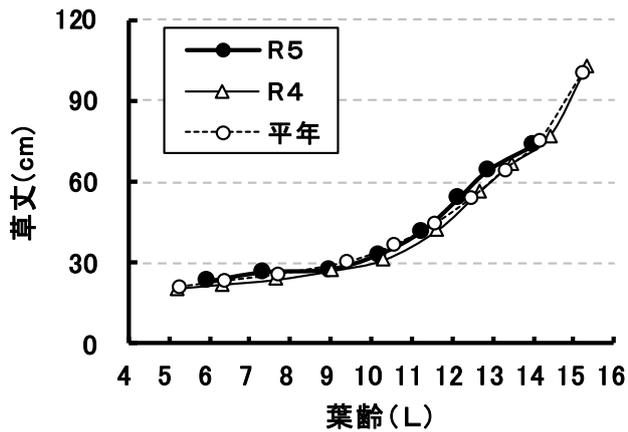


図6 草丈の推移 (生観てんこもり)

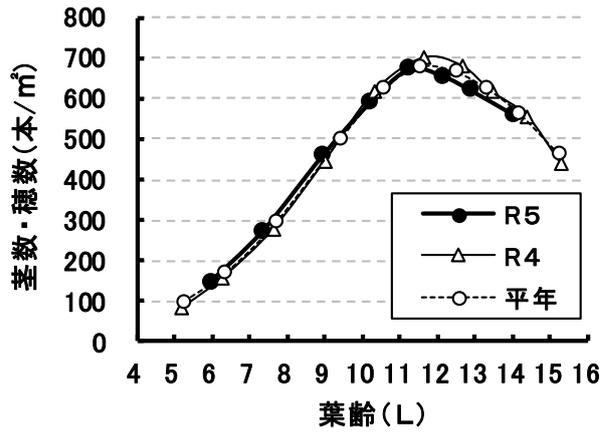


図7 茎数の推移 (生観てんこもり)

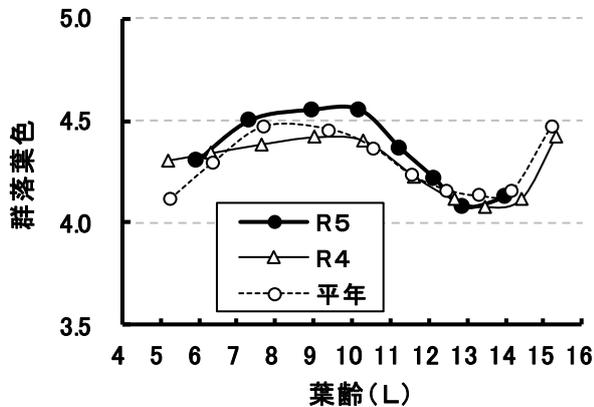


図8 葉色の推移 (生観てんこもり)

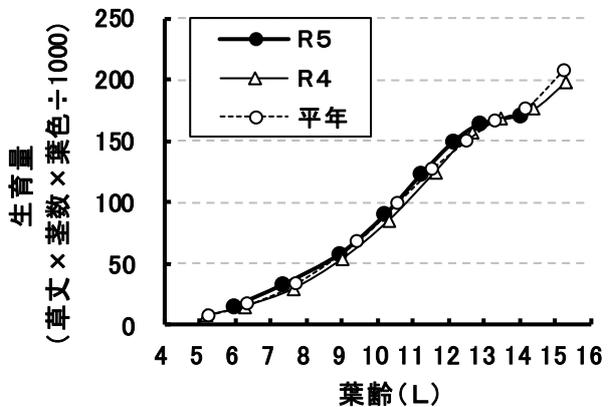


図9 生育量の推移 (生観てんこもり)

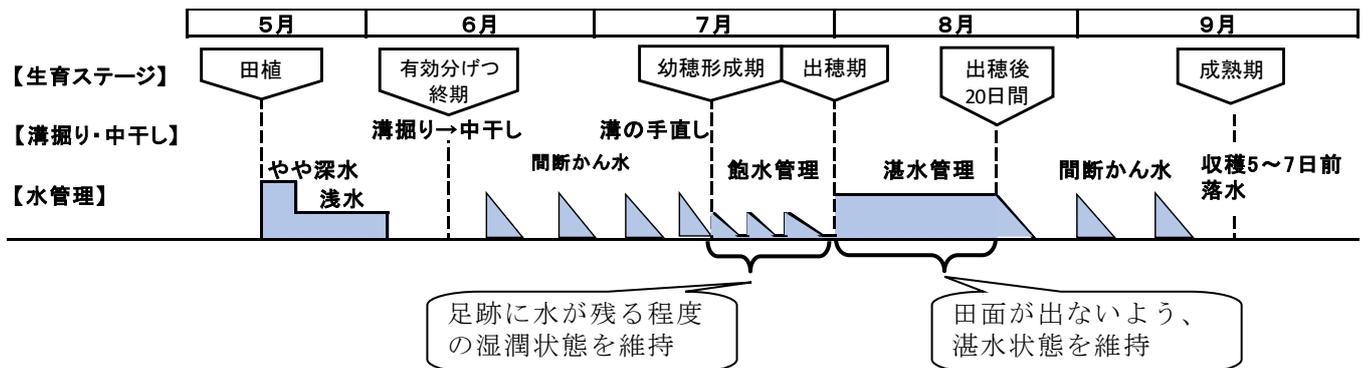
3 当面の技術対策

- ・「コシヒカリ」、「てんこもり」は、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を徹底し、稲体の活力を維持する。
- ・出穂後 20 日間は湛水管理を徹底する。
- ・「コシヒカリ」の肥効調節型基肥栽培では、出穂 7 日前頃までの葉色診断に基づいて追加穂肥を施用する。
- ・「てんたかく」の防除は、穂揃期（出穂後 3～5 日）と傾穂期（穂揃期防除の 7 日後）に確実に実施する。

(1) 「コシヒカリ」の管理

- ・ 穂揃期の葉色を 4.2～4.5（砂壤土 4.5）に誘導するため、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を徹底し、稲体の活力を維持する。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水管理を徹底する。

<水管理のイメージ>



<肥効調節型基肥栽培>

- ・ 出穂 7 日前（幼穂形成期から 14 日後）に葉色が 4.0 (SPAD 値 32)、砂壤土では 4.2 (SPAD 値 34) 未満と淡いほ場では、出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追加穂肥を行い、穂揃期の葉色を 4.2～4.5（砂壤土 4.5）に誘導する。

稲体の活力が低下しないよう、適正葉色に誘導

表 3 「コシヒカリ」の出穂前の追肥対応（肥効調節型基肥栽培）

出穂 7 日前頃の葉色	追加穂肥対応
4.0 未満（SPAD 値 32 未満） ※砂壤土は 4.2 未満（SPAD 値 34 未満）	出穂 3～7 日前に N 成分で 1.0kg/10a
4.0 以上（SPAD 値 32 以上） ※砂壤土は 4.2 以上（SPAD 値 34 以上）	無し

<分施栽培>

2 回目穂肥は、1 回目穂肥の 7 日後に、1.5～2.0kg/10a を確実に施用し、穂揃期の葉色を 4.2～4.5（砂壤土 4.5）に誘導する。

(2) 「てんたかく」の管理

- ・ 5月3日移植の「てんたかく」の出穂期は、近年より1日早い7月15日となった。
- ・ 今後、平年並の気温で推移した場合、成熟期は8月19日頃と見込まれる。
- ・ 出穂後20日間は湛水管理を徹底する。
- ・ 刈取りの5～7日前までは、良好な登熟に必要な水分を十分確保できるよう間断かん水を徹底する。

成熟期が近年より早くなると見込まれるので、
収穫・乾燥や荷受けの準備は早めに行う

表4 「てんたかく」の生育状況（生育観測ほ）

品種	年次	田植日	幼穂形成期	出穂期	成熟期
てんたかく	R5	5月3日	6月24日	7月15日	(8月19日)
	R4	5月1日	6月25日	7月14日	8月21日
	近年	5月2日	6月25日	7月16日	8月21日
	前年比・差	2	-1	1	(-2)
	近年比・差	1	-1	-1	(-2)

注1) 近年 : R2～4年の平均

注2) 本年の成熟期は予測値

(3) 「てんこもり」の管理

- ・ 飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を徹底し、稲体の活力を維持する。
- ・ 出穂後20日間は湛水管理を徹底する。
- ・ 分施における2回目の穂肥は、幼穂形成期の10日後に、土壌条件に応じて1.5～2.0kg/10a施用し、穂揃期の葉色を4.2～4.5に誘導する。

(4) 病虫害防除の徹底

ア 斑点米カメムシ類

- ・ 畦畔等の雑草地における確認地点率は84.7%（平年88.6%）、平均頭数は10.8頭（平年11.6頭）で、捕獲頭数がかなり多い地点もあった。
- ・ 早生品種の防除は、粉剤又は液剤体系とし、穂揃期（出穂後3～5日）と傾穂期（穂揃期防除の7日後）に確実に実施する。
- ・ 「コシヒカリ」及び「てんこもり」等の中晩生品種は、穂揃期の防除を徹底する。
- ・ 例年発生密度が高い地域や、防除後も水田内のすくい取り調査で侵入が認められる場合は、追加防除を行う。
- ・ 近隣に雑草地や麦あと不作付地等がある水田では、発生が多くなる場合があるので本田防除を徹底する。
- ・ 本田内のノビエやホタルイは、斑点米カメムシ類の侵入を招き、斑点米被害を助長するので、除草に努める。

イ いもち病

- ・ 本年は7月4日に初発を確認した。
- ・ 常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。また、穂いもち防除を確実に行う。
- ・ BLASTAM 情報（葉いもち予測システム）はこちらから  
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）

ウ 紋枯病

- ・ 本年は7月5日に初発を確認した。
- ・ 前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）または品種ごとの散布適期（粉剤、液剤等）に防除を確実に行う。
- ・ 「てんこもり」ほ場では、箱施薬剤を施用した場合でも出穂7日前頃に発病株率を確認し、必要に応じて防除を行う。
- ・ その他のほ場では、要防除水準を参考にし、適期に防除を行う。

表5 紋枯病の防除要否判定時期（薬剤散布適期）と要防除水準

品 種	防除要否判定時期 （薬剤散布適期）	要防除水準 （発病株率）
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり 箱施薬無	出穂7日前頃	防除実施
てんこもり 箱施薬有	出穂7日前頃	15%（暫定値）

エ 稲こうじ病

- ・ 常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

オ 着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・ 登熟期間の高温や稲体活力の低下により発生が助長されることから、適正な施肥、水管理を行う。

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈、茎数、葉齢、葉色は並であった。

幼穂形成期は、近年より1日早い7月12日となった。

今後、気温が平年並に推移すると、出穂期は近年より1日早い8月3日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月18日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R5	5月16日	71.8	23.4	508	12.5	4.2	35.4	7/12	(8/3)
R4	5月16日	77.7	22.4	472	12.8	4.2	35.6	7/10	8/3
近年	5月15日	72.8	23.5	505	12.6	4.2	36.4	7/13	8/4
前年比・差	0	92	105	108	-0.3	0.0	-0.2	2	(0)
近年比・差	1	99	99	101	-0.1	0.0	-1.0	-1	(-1)

注1) R5：10ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、栽植密度・遅植え・ブラ改善（うち立山、小矢部）対照区：6ほ場）

注2) 近年値：H29～R4の平均、本年の出穂期は予測値

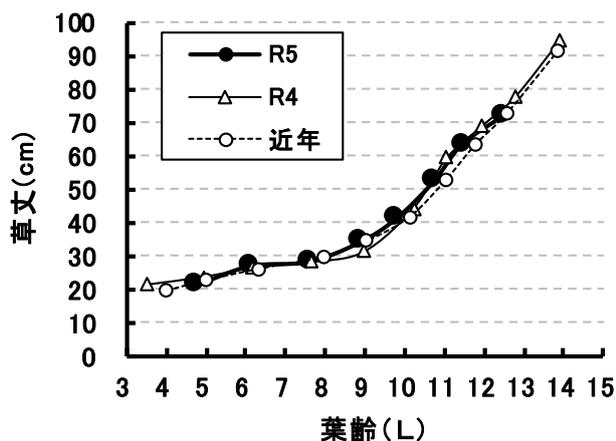


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

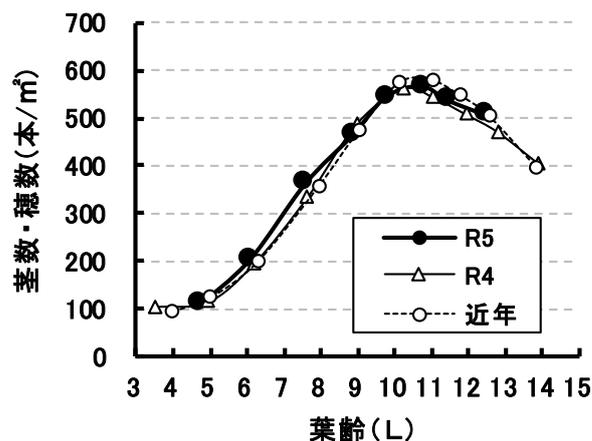


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

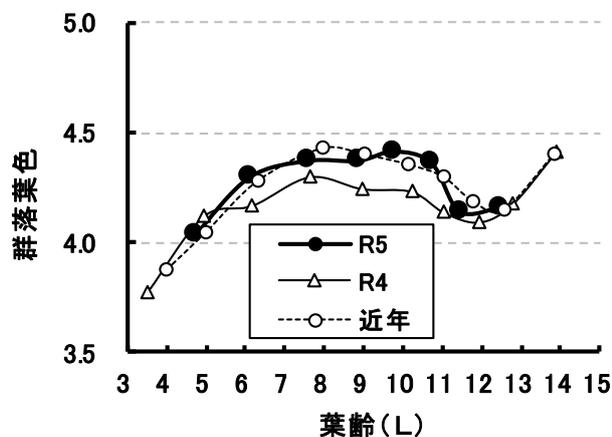


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

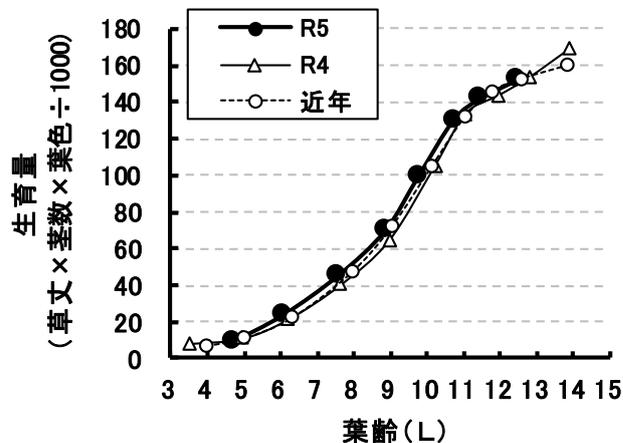


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

2 当面の技術対策

- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理を行う。ただし、葉色が濃い場合は、間断かん水を行う。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水管理を徹底する。
- ・ 分施栽培では、2 回目の穂肥を確実に施用する。
- ・ 刈取りの 5～7 日前までは、間断かん水を徹底する。

(1) 水管理

- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理（足跡に水が残る程度の湿润状態を維持）を行う。ただし、過剰籾数を抑えるため幼穂形成期の群落葉色が 4.2 以上と濃い場合は、間断かん水を行う。
- ・ 穂揃期の群落葉色を 4.4 (SPAD 値 35) に誘導する。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水管理を徹底する。
- ・ 良好な登熟に必要な水分が十分に確保できるよう、刈取りの 5～7 日前までは間断かん水を徹底する。

穂揃期にかけての葉色が濃く推移した場合、1 穂籾数が多くなり、品質低下が懸念されることから、今後の適切な水管理により目標の葉色に誘導することが重要

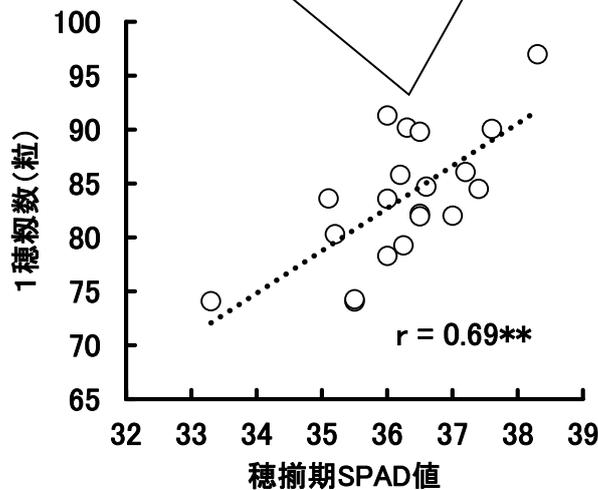
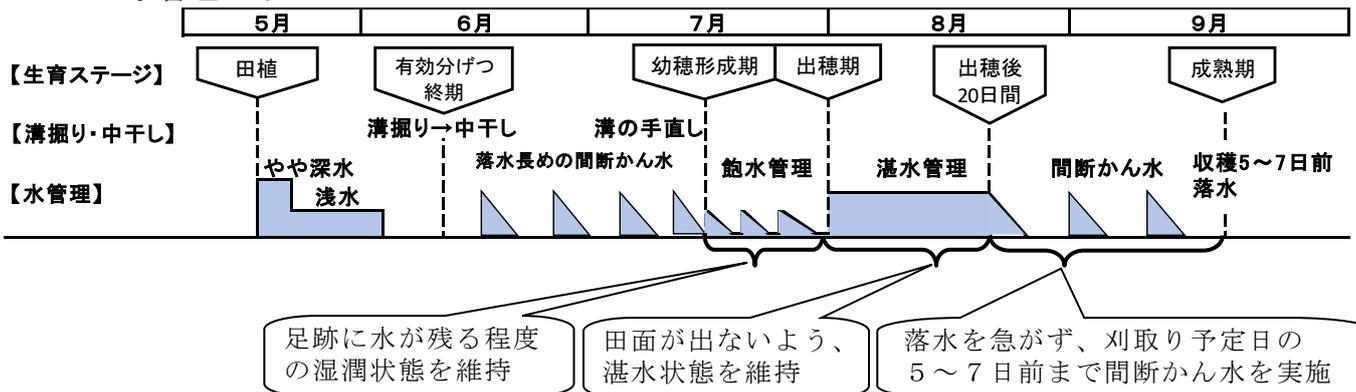


図5 穂揃期の SPAD 値と 1 穂籾数の関係
(R2、R4 富富富生育観測ほ等)

<水管理のイメージ>



(2) 「富富富」肥効調節型基肥栽培の管理

- ・ 原則、追加穂肥は施用しない。
- ・ ただし、幼穂形成期の14日後のSPAD値32（群落葉色4.2）未満の場合は、出穂3日前（走り穂が確認される頃）までに窒素成分で1.0kg/10a程度の追加穂肥を行い、穂揃期のSPAD値35（群落葉色4.4）に誘導する。

(3) 「富富富」分施栽培における2回目穂肥

- ・ 1回目の7日後に窒素成分で1.5kg/10aを確実に施用する。ただし、1回目穂肥を施用しない場合は、幼穂形成期の14日後に窒素成分で1.5kg/10a施用する。
- ・ ただし、2回目穂肥を施用する時期の群落葉色が4.2未満の場合は、穂肥量を窒素成分で2.0kg/10a施用し、穂揃期の葉色を4.4に誘導する。

(4) その他の管理

病虫害防除は、「コシヒカリ」に準じて実施する。ただし、生育期間を通じた化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるよう留意する。

穂揃期調査結果については、「てんたかく」は7月25日（火）、「コシヒカリ」、「富富富」及び「てんこもり」は8月9日（水）を目処に報告して下さい。

また、「コシヒカリ」について、「穂揃期の抜株（平均穂数・3株）」をお願いします。